パレット評判記（二）

ヱス、キタヤマ

故大下藤次郎氏のパレット　パレットと一口に言ッても段々ある、これはまた素適滅法界に上等のパレットで、さうして今は大下家の家寶の一ッに列せられた榮譽ある遺愛のパレットなのである。

何でも三十六年の春頃英國のニユマンと言ふ老彩料店から洋行中に購められたさうでアルミニユム製の二枚折で、裏にはNEWMAN.と刻印が銘てある、三寸八分に八寸と言ふ大きな——割合に輕い——品物だ、中は矢つ張りヱナメル塗り、仕切は十五付いて居る、價は幾らしたか誰にも分らない、があまり安くはなかつたらうと想像が出來る、そして三十六年から、つい此間まで御奉公した此パレットの何處に一點の傷もなければ、無論修繕した跡も認められぬ——左の端から列べられた繪具の名を擧げれば、ホワイト。レモンヱロー。オレオリン。カドミウムミツドル。ヱロオーカ。バーミリオン。ライトレツト。バーントシーナ。ブラウンマダー。ローズマダー。ブラウンピンク。インヂゴー。コバルト。オルトラマリン。ビリヂアンと云ふ順序でホワイトの場所の内隅にネープルスヱロー、パレットの眞中にコバルトグリーンが押出されて居る——繪具は大底ニユマンだがニユトンの乾製を煉り直して使はれたことも覺えて居る。次は誰？

友へ

南のわかもの

K君

私は此頃いろんな事を考へます。何んだか考へずにはいられぬやうな心持がします。考へれば考へる程いろんな問題が出來てきて、仕舞には壓迫されるやうな苦痛を感じます。でそれから逃れる爲につまらぬ遊戯をします。其中に淋しくもの足りなくなつて來て又ものを考へるやうになるのです。其考へた事はつまらぬ事かも知れませんが、それでも私の眞面目に考へた事なのです。

私は技巧と云ふものを尊重します。技巧と云ふもの無しには繪は描けないかと思ひます。然し今私の云はうとする所は、昔から云ふ單なる筆づかひと云ふやうなものではありません。無智な人々を欺く爲に筆の先でごまかす事ではありません。作家が其主觀を繪と云ふ形式——其他の藝術でも同じかと思ひますが、今は繪ばかりに就いて云ひます——で表はそうとする時、畫布の上に繪具を着けるのに、其作家の心のふるへを其まゝに傳へやうとする事なのです。そうした場合に其形式は卽ち内容なのでは無いでしようか。私はそう云ふ意味で技巧に腑心したいと思ひます。

或日Y君の家でY君が繪を描くのを見てゐました。それはもやの深いある寒い夕方でした。西の空にはローズ色が流れ、其空と融け合つて淡い鼠に丘が見へてゐて、それから手前の電車

道までは、立ならぶ家々が灰色に模糊としてゐました。そして入日の名殘が川岸の二階屋の新らしい雨戸に赤く消へ殘り、電車道を通る人は默して急ぎ足に行きます。Y君は畫布の上にそれ等を取入れやうとしてゐたのです。

渠れは色を付け始めました。

其色は私の期待に背き。又Y君が平常の主張に反したコンヴェンショナルなものでした。Y君は此頃僞らぬ自身の感情を描くのだと云つて居ります。その人が今描きつゝあるコンヴェンショナルな色——渠の畫布には、空と遠景の淡いなつかしさは丸でぶちこわされて。空は黃色に暉き、丘はコバルト色に強く空を限つてゐました。そしてあるか無きかの川端の冬枯れかゝつた柳の葉さへ、綠色にはつきりと寫されました。私は其れを見てゐながら習慣の根强い力を恐れました。因習を脫すると云ふ事はなか々々たやすい仕事ぢやありませんねえ。

私は『ΘΗCΠΗO』や外國の展覽會のカタログなどを見る事はあんまり好きぢやありません。それは私とは沒交涉な繪が多くあるからなのです。然しそれ等の繪を見て感心した事があります。それは外國人の繪が、いかなるやり方のものにしろ、つきつめた所までやつてある樣に見える事です。日本の畫家の描いた繪には不徹底な、中途半端な、自己を欺むいたやうなものが、これまで隨分多かつたではありませんか、私達は自分の心から、そんな不眞面目な分子を排斥せねばなりません。

私の知人で日本畫をやつてゐるのがあります。私が或要事で其家を訪ねた時。渠は私に今描きかけてゐると云ふ繪を見せました。それは「草紙洗の小町」とか云ふのだそうで、折紙のやうな布の中に、人形のやうな女の首を繪扇とがはさまつてゐて、其脇に渠れが水鉢だと說明した、いやに丸味を見せた黑い火鉢のやうなものゝある繪でした。其繪に就いて渠れはいろ〳〵の事を話しました。第一それは新らしい試みだと云ひました。私達の心には何の感動をも起さない、其細引のやうな輪廓の線がそれだと云ひました。其輪廓に區切られて、色板をならべたやうに平面に塗られた感じの惡い色のいろ〳〵もそれだと云ひました。そして其着物の模樣は大いに參考書をしらべたのであつて其模樣の表の方は金箔を置き裏からすけて見へるのは金粉をぬるのだと云ひました。

又渠の先生は、渠がそふ云ふ新らしい試みをする事を嬉んでくれないと云ひました。それでゐて先生は自分が展覽會などに出す畫はやはり同じやうなやり方をするのだそうです。そして他人から聞かれると、一寸いたづらをやりましたと云ふ風な答をして、世評に對する責任を逃れやうとすると云つてひどく憤慨してゐました。

私は草紙洗の小町と云ふ故事さへ渠の說明をもとめねば知らぬ程の馬鹿者ですが。どうも渠の思想が新らしいとも。又其壁紙の模樣のやうな繪が新らしい試みだとも思へません。寧ろ私が五年も前に考へた事より淺墓な事かと考へます。

ですが此頃の日本畫家で新らしい試みをやると云ふ人々の中

で、横山大觀氏と外二三氏を除いたら、多方はこんな風でわないでしようか。いや日本畫家ばかりではありません、お手近な所にもそんな人達が澤山居わしないでしようか。

時計が十二時十五分前を指してゐます。私はもつといろ〳〵書きたく思つて居りましたが眼はさへてゐても頭が亂れます。蟀谷が痛くなりました。さらば又次にしませう。（十二月九日夜）

秋季横濱支部展覽會を見る

K、Y、

拾一月の風は寒いが陽氣は小春日和の暖い十一日の午後港町河岸の眞港館へ水彩畫研究所横濱支部の第二回水彩畫展覽會を見に行つた暗い梯子を登つて三階へ上ると其處が會場だパット眞ともに西日を受けた明るい室だ。は入つて右側から二段に成つて會員の作が五十占許り並べて有る。自分はわづか許りの寸暇を得て來たので唯ずうと一通見た丈けでそれに淺學な自分は批評する力はないが覺へて居る丈の作品に對して自分の頭に感じた事丈を書く。平田氏のは風景よりは靜物の花の方が色も形も善ひ。高畠氏は餘暇のない人にかゝわらず、つとめて善く出す人だ今年も七枚出して居る。秋晴、屋根の調子が少し弱くはないかその故か薄ぺらに見へる地面は面白いが樹木の葉の間から空のすいて見へる處へ餘り白を使ひ過ぎて目ざわりだつた。追分。は達筆で非常に面白く感じが出て居た同氏中の佳作だ山手。コンポジーも惡ろく色の遠近もなく額から落ち相に見えた芦の湖、誰も善く描く場所だが左の遠山はいくらスケツチでも餘りぞんざい過ぎるそれに水も不透明で白粉の様だ。仙石原、柿紅葉共に面白く思つた

鷹野さい子氏の靜物、二枚共唯描いた丈けで遠近なく物體の反射なく未だ〳〵前途は遠い〳〵遠藤宏氏の書齋背から下丸身なく疊は硝子の如く窓の外の感じは作者の再考を用す不可解、失禮だけれど未だ此んな物に手を下すのには早いと思つた、港。餘りに飛び放れた調子で港の景としては廣い感じがしない森の色は强すぎる台ヶ岳の裾、晩霞氏の石版畫を見る様な氣麗な畫だが人物は少し色が强い様に思われた。夕の海、上半の感は出て居るが下半は少し變だ小舟は無くもがなと思つた

淺雪は面白く見た、溪流同氏中の佳作と思つた石の形など事に面白く調子も善いと思つた谷、河原の石色は强過ぎはしないか何んだか突び出して見えた八王子はスケツチなれど筆が輕くて面白かつた、

田中氏は昨年と丸で描法が變つた様に思われたが自分は同氏の先の描法が善い、今年のは惡いとは言はないが好不好から言へばをとなしい、昨年の描法が自分は好きだ極言すれば今度のは茨木氏の眞似と思はれる惡口はよして雨の跡、輪廓の正しい好い畫だが少し色が寒い鹽尻、中央の木の葉の赤いのは餘り調子はずれでチレンヂの團子が成つて居る様だ。

せんさの湯、調子と輪廓は例に依つて正しいが何人だか未醒か夢二のコマ畫を見る様だ小雨、小雨の感じは少し薄い道の描法は餘りひねり過ぎはしまいか硝石板をつき合はした様だ甲州駒ヶ岳、紫ぼい、はでな色の强い畫だ初め油畫かと思つた、甲非駒色が嫌に强くて不快な畫だ、秋見はをちつきの有る調子の好い畫だが右手の太い木はなくてもよいと思ふ四月、輕い筆で氣持の好い畫だが雲は少し不自然と思う、雲の影水が不透明だ、夕方の感じが更に出てない辨天通の邊でよく見る賣畫の様な感じがした初夏スケツチとしては上午后の日遠山に强く日の當た